

学生による企画展の振り返り： 金沢大学における博物館実習の事例

Recapitulation of the Student Exhibition:
A Case Study in Museum Practical Class in Kanazawa University

笠原 健司¹、笠原 朋与²、野村 将之²、虫明 慧子²、渡辺 司²、有村 誠³

Takeshi KASAHARA, Tomoyo KASAHARA, Masayuki NOMURA,
Satoko MUSHIAKE, Tsukasa WATANABE, Makoto ARIMURA

1 金沢大学資料館 学芸員、2 金沢大学人間社会環境研究科
3 東海大学文学部歴史学科考古学専攻 准教授

1. 博物館実習と学生による企画展

金沢大学では、2014年度より、博物館実習の一環として学生による企画展を開催してきた。2014～2015年度に行った企画展を含む博物館実習の概要については、すでに別稿で紹介した¹。本稿では、特に2015年度の学生による企画展を取り上げ、実習に参加した学生、担当教員、そして資料館学芸員が、学生企画展の開催に至るまでのプロセスやその事後評価について報告を行う。これにより、大学博物館で博物館実習として学生企画の展示を実施することの意義や問題点などを多角的に浮かび上がらせることができると考える。また本報告が、大学博物館で博物館実習を受け入れている、または、受け入れを検討している他機関の参考になれば幸いである。

本報告のはじめとして、私が博物館実習の担当教員であった立場から²、学生による企画展立案の経緯について述べたい。

学芸員養成課程の一科目である博物館実習は、実践的な経験や訓練を積む場として、博物館科目群の総仕上げ的な位置にある。周知のとおり、博物館実習は「学内実習」と「館園実習」からなっており、前者は2単位相当、延べ60～90時間以上、後者は1単位以上、延べ30～45時間以上の授業を行うことが推奨されている（文部科学省2009『博物館実習ガイドライン』）。

本稿で取り上げる学生主催の企画展とは、学内実習の一部として大学付属の資料館で行われた展覧会である。学内



図1 学生による企画展のポスター

実習は、週に2コマ、年間を通して学内で行われた。『博物館実習ガイドライン』によれば、学内実習の目的とは、「博物館における館園実習の事前・事後指導と他の科目の補足を兼ねて、学内の実習施設等において資料の取り扱いや収集、保管、展示、整理、分類等の方法、調査研究の手法等について学ぶこと」とされる。この記述を参考にしつつ、学内実習の授業プランは特に次の2点を満たすように構成した。

第1は、学内施設である金沢大学資料館と共同で実施することである。これは、博物館実習は大学博物館である資料館にとっては、参画すべき活動の1つであると捉えていたからである。これについては、別稿で論じたので参照いただきたい³。

第2は、学生主体の実践的な活動にすることである。このことは、私が金沢大学に着任した際に学生から受けた印象がきっかけになっている。着任当初、博物館実習の授業で学生から感じたのは、実習に参加させられているというネガティブな雰囲気であった。一見して、博物館実習の彼らは楽しくなさそうだった。確かに、資格を取るための授業では、資格に必要な知識やスキルを詰め込まれるために学生が受け身の姿勢になるのも仕方のないことなのかもしれない。しかし私は、学芸員養成課程の授業については、学生が多少は楽しむようにならなければ無意味だと考えた。それは、学芸員資格を取得しても学芸員として就職できる学生がほとんどおらず、その一方で毎年数十人もの資格取得者の学生が卒業しているという現実があるからである。こうした状況は、考えようによれば、学芸員となる学生は少なくとも、博物館・美術館に理解のある多くの人材を毎年世の中に輩出しているともいえなくもない。そう考えることができるならば、少なくとも学芸員資格を取得する学生には、博物館・美術館好きになってもらいたいのである。そこで、学生が積極的に取り組めて達成感が得られること、そして何よりも楽しめることをねらいとして、資料館で実際に展示を行う「学生による企画展」を学内実習の最終段階に組み込んだ。

通年の学内実習は大きく前期（4～8月）と後期（10～12月）に分けて行った。前期では、資料館の収蔵資料を実際に扱いながら博物館資料の整理、分類、取り扱い方などを実践的に学ぶ授業とした。後期には、学内実習の総仕上げとして、資料館展示の準備を始めた。資料館では、毎年12月初旬に会期3か月程度の企画展を開催しており、この展覧会を学生が担当したのである。

資料館の企画展を学生に任せるにあたり、私が心がけたのは、学生がすることにできるだけ口を挟まないということである。基本的に展示企画の全過程を学生に丸投げした。学生へのサポートは資料館との調整など最小限にし、よほど学内授業として常識に反したことでもやらないかぎり、口を出さないことにした。実際、学生は発想、計画性、行動力のいずれをとっても想像以上の能力を発揮し、担当教員としてはたまに発破をかけるくらいで済んだ。

企画展を準備する上で、学生にとっては館園実習に参加した経験も大いに役立ったようである。学外の博物館・美術館で行われる館園実習の実施時期はだいたい7～9月に集中していることから、後期に企画展の準備に入る頃には、館園実習を修了した学生が多かった。各館で行われる館園実習の内容はさまざまであり、それに伴い、学生が学んできたスキルや経験なども多種多様であった。しかし、館園実習後の学生には共通した変化がみられた。それは、展示の鑑賞者を意識するようになったことである。これは学内実習だけではなかなか得られない点であり、実際に来客に対応している博物館・美術館での館園実習でこそ得られた経験といえる。こうした意識の変化が、企画展の準備に良い影響を与えたようであった。

学内実習の問題点についても触れておきたい。4月から始まる博物館実習への参加希望者は毎年20～30名程度であった。そのほとんどが4年生であり、大多数が春から夏にかけて就職活動を行

うことから、学生の中にはしばしば授業を休まざるを得ない者もいた。休んだ学生には、可能な限り、授業時間外に欠席した回の授業内容に関する課題をこなしてもらうことにしたが、それでもそうした時間も確保できない学生が何人か出た。就職活動、各種実習、卒業論文を並行して行う今の4年生は忙しすぎるのだろう。博物館実習を3年生までに履修できるようにカリキュラムを編成するなどの工夫も可能かもしれない⁴。しかし、日程的に大変だと思うが、4年生での実習は、大学生活のまとめとして位置づけることもできるため、私はやはり博物館実習は、大学4年目での履修がふさわしいと考えている。

授業担当者としては、学内実習に学生企画展を組み込む試みは、学習効果の点からも、学生の達成感の点からも十分な成果が上がるものだったと評価している。そして、学内機関である資料館側にとっても、学生に企画展を担わせることには、十分なメリットがあったと感じている。

以下では、2015年度に博物館実習に参加した学生と資料館学芸員が、それぞれの立場で2015年度の学生企画展の振り返りを行う。

(有村)

2. 企画展のテーマの選択について

(1) 企画展のテーマ決定までの経過

本章では企画展「破かれた恋愛小説～『寒潮』に翻弄された四高生～」のテーマ選択の動機と決定までの経過を述べる。

実習生が本企画展についてはじめて協議したのは、開催のおよそ4ヶ月前の8月末であった（表3）。この時の協議では企画展のテーマについてと、企画展の準備を進めて行く上での組織体制について話し合った。企画展を準備する実習生は20名であったので、これだけの多くの人数をまとめるためにリーダー2名を選出し、さらに実習生を4つの班に分けて各班で企画展のテーマについて議論した。

この時点では本企画展テーマ以外にも前身校である第四高等学校（以下「四高」）にまつわるもの、石川県内の習俗に関するもの、金沢大学が周囲を山に囲まれていて自然豊かであることから生物に関するものなど約20個のテーマが候補として挙げられた（表1）。これらの多くのテーマから1つに絞るに当たり、以下4つの要素を念頭に置き協議を進めた。

- ①対象者が明確であること
- ②資料館常設展と差異化を計った学生独自のアイデアであること
- ③実習生の興味に沿っていること
- ④資料館に資料が存在すること

②を設定した理由は、普段資料館展示室に来場しない人にも来場してもらうためである。一方で、集客力を考えるあまり実習本来の意義を失う恐れがあったために③を設定した。実習生の専攻分野は様々であり各自の興味も同一ではなかったため、より多くの実習生が興味を持てる内容を多数決で決定することにした。

企画展のテーマを決めるのと同時に、自然に本企画展の目的についても考えることとなった。博物館実習の一環として始まった本企画展であるが、せっかく実習生の手でやるならばその成果を多くの人に見てもらいたいという思いがあった。また、実習生の中にはこれまでの経験から博物館というものに対して「堅くて退屈だ」というイメージを持つ者もいたため博物館展覧会に対するその

ようなイメージを払拭したいという思いもあった。したがって、一方的に専門的な知識で魅せる企画展というよりは、どんな来場者にとってもわかりやすく、来場者が能動的に展示物にアプローチできるようなものを目指した。

協議の結果①に関しては会場が大学の図書館内に位置する資料館展示室であり、また金沢大学は市街地から離れており大学関係者以外の一般の来場者は想定しにくかったため、主な対象は大学生とすることが決定した。また②に関しては来場者にとってインパクトがあり、かつ馴染みのあるものがよいという意見が挙げられた。そこで大学生の間でも関心が高く、身近な「恋愛」の要素を取り入れることとなり、テーマは「大正ロマン」「青春」「婚礼」などに絞られていった。この時点では恋愛そのものをテーマとして扱うか、恋愛の要素も取り入れつつ婚礼などの石川県の年中行事をテーマとして扱うかで意見が割れていた。最終的に本企画展のテーマに辿りつくことができたのは、新聞小説『寒潮』の存在を知ったことが大きかった。同小説は1908年（明治41年）1月1日から大阪毎日新聞に連載されていた恋愛小説である。3章で詳しく述べられているためここでは詳細な説明は割愛するが、同小説の中の主人公「乙哉」は四高生をモデルにしており、実際に存在する金沢市内の地名も登場する。こうした前身校四高との関連があり、話の内容も興味深かったため『寒潮』を目玉の資料として展示しながら既に決定していた恋愛の要素も含ませる本企画展のテーマが決定した。さらに四高生の実態や校風改革とも関連させることで展示資料に幅を持たせられることが期待できた。目玉となる資料が文献資料であり、また来館者の多くには馴染みがないと予想されたため、わかりやすい解説と紹介を心掛け、さらにハンズオン（体験型展示）や視覚に訴えるモノ資料の展示も行うという方針までが決定した。

(2) 企画展のタイトル決定に至るまで

テーマが決定してから展示のアイデアの決定は比較的円滑に進んだが、難航したのは企画展タイトルの決定である。テーマが決定してからタイトルが決定するまでに3ヶ月の時間がかかった（表3）。先に述べた通り目玉となる資料が文献資料であるため、来館者は企画展に対して難解な印象を持つであろうことが予想された。そのため、タイトルを考えるにあたっては来場者に興味を持ってもらえるようなキャッチーな文言と「寒潮事件」のスキャンダラスな雰囲気、「恋愛」の文字を入れたいという意見が多かった。そこで最初に決定したタイトルは「四高生、恋、ノンフィクション～墮落か娯楽か『寒潮』展」であった。このタイトルは確かにキャッチーではあったが、展示の内容が想像しにくい点と「墮落」という文言が大学で行う展示としてそぐわないという観点から適さないであろうという結論に至り、再度タイトル案を考えなければならなくなった。タイトルに「恋愛」もしくは「恋」「四高生」「小説」「寒潮」を入れることを条件とし、いくつかのタイトル案が挙げられた（表2）。この中から実習生の多数決によって本企画展のタイトルが決定した。

(3) 展示の準備作業

以上のような全体での決定事項を協議しながら、実際の作業を進めていくために、実習生は4つの班に分かれて作業を行った。これは作業の効率化と実習生全員で均等に分担するためであった。班の構成は、展示資料を扱う展示班（5名）、展示資料のキャプションと小説の解説文を作成するキャプション班（8名）、企画展のチラシ、ポスター、キャプションのデザインを作成するデザイン班（3名）、企画展と連携した企画、ミュージアムツアー、広報を担当する企画班（4名）となった。

(4) 事後評価

まず、テーマ・タイトルの決定における評価について述べる。テーマ決定の議論の中で、資料を1つ決めてそれを中心にしたテーマを据えて展示するのか、テーマを先に決めテーマに沿った資料を網羅的に展示するのかという点が争点となっていた。資料館にある資料は膨大であるためその中から中心となる数点を決めるには何かしらのテーマが必要になるが、テーマを先に明確に決めてしまうとそのテーマに沿う資料が資料館に少ない可能性もある。そのため実習生が実現したいテーマと、実際の収蔵資料の有無についてバランスをとりながら考えることとなった。実習取り組み以前は単純にテーマを決めた後に詳細な部分を決定するものだと考えていたが、実際に企画展を形にする段階になるとテーマ決定の段階で具体的な展示品と展示の方法にも配慮して決定する必要があることを強く感じた。また先に述べたように、テーマ決定からタイトル決定までに時間がかかったが筆者はむしろこれを良かった点として捉えている。テーマの決定以後、展示可能な資料のリストアップを行い、資料を選定しながらコンセプト(①『寒潮』の解説・紹介、②四高生の気風、③「寒潮事件」の概要、④寒潮に関連した超然主義の解説)をより明確化した後でタイトルをつけることができたからである。

次に実際の作業上での評価を述べる。全員の意見が必要となる協議を行う上で授業時間外でも全体での話し合いと情報交換を行えるように、全員が参加する通信アプリを用いての協議を行い、時間を有効活用することができた。一方で全員が意見を投稿できる形であったので、情報の重複、要点がわかりづらいなどの欠点もあった。特に資料館職員との情報交換においてこれが顕著であったために、途中から班の代表者のみが資料館職員と連絡を取り合うという措置をとったが、実習生間での情報共有が不十分だったと思う。また、4つの班に分かれたことで、効率的に平等に作業を進めることができた点は評価できる。ただし作業を分担する分、情報の共有が必要不可欠になるのだがこれが不足すると作業が停滞し、各自の作業が完了した後に齟齬が起きたこともあった。課題として、メディア上の大人数での意見交換の場ではある程度の量の文章で情報をまとめ、実習生だけでなく関係者全員が閲覧できるような媒体を使用することが望まれる。

(笠原朋与)

表1 企画展テーマ候補一覧

金沢大学、四高にまつわるもの	石川県内の習俗に関するもの	生物に関するもの	その他
<ul style="list-style-type: none"> ・大正ロマン ・恋愛 ・四高生の青春 ・教育アルバム ・金大生の過去の研究と現在の研究の紹介 ・日常に潜む金沢大学 	<ul style="list-style-type: none"> ・加賀藩の年中行事 ・角間や金沢市の開発の歴史 	<ul style="list-style-type: none"> ・角間の動物 ・生物展 	<ul style="list-style-type: none"> ・乗り物 ・金沢－東京の関わり ・資料の出自で日本全国網羅 ・文房具 ・資料のデザイン ～資料館資料の模様を取り上げる～ ・戦争

表2 企画展タイトル候補一覧

<ul style="list-style-type: none"> ・ 寒潮事件～幻の恋愛小説からみる四高生の姿～ ・ 寒潮事件～寒潮に翻弄された四高生 ・ 四高生(たち)の恋愛～寒潮事件とは～ ・ 明治の恋は嵐を起こす～恋愛小説「寒潮」と四高生の関わり～ ・ 熱愛発覚～幻の小説「寒潮」からみる四高生の姿～ ・ 小説「寒潮」～四高生モデルの恋愛小説はなぜ消えたか？ ・ 熱愛発覚～恋愛小説「寒潮」と四高生の気風～ ・ 恋の罠～恋愛小説「寒潮」と四高生の気風～ ・ 熱愛発覚～恋愛小説「寒潮」から読み解く四高生のプライド～ ・ 熱愛発覚、恋の罠、破かれた恋愛小説 ・ 四高生、恋、ノンフィクション～墮落か娯楽か「寒潮」展～ ・ 四高「寒潮事件」～破かれた恋愛小説～ ・ 破かれた恋愛小説 ～「寒潮」に翻弄された四高生～

表3 企画展開催までのスケジュール

8月		
24日	テーマ決定 部署分け	
10月	ポスター、チラシ案決定	
1日	部署メンバー決め	
8日	展示室区切り、導線決定 企画案：顔出しパネル、 恋愛エピソード、図書紹介に決定	
15日	ミュージアムツアー日程・メンバー決め twitter運営開始	
22日		テレ金ちゃん出演決定
26日		企画書第一案提出
29日	タイトル決定 解説パネルの使用枚数決定 顔出しパネル図案完成 ほんわかふえへポスト設置の許可をもらう 図書紹介リスト、図書の表紙画像提出	
11月		
3日	ポスター、チラシ完成	
5日	使用する展示ケースの選定と、配置の決定	
11日	顔出しパネル完成	ラジオ出演決定
19日	キャプション文章決定 ほんわかふえに恋愛エピソード収集用ポスト設置	ラジオ収録
26日	キャプションデザイン完成 展示パネル、キャプションパネルのサイズ決定	
12月		
3日	恋愛エピソードを編集、ipadに出力	となりのテレ金ちゃん出演
4日		
6日		FM石川（ラジオ）放送
7日	展示室の資料配置完成 解説パネル、キャプションパネル完成	
8日		
9日	図書紹介展示設営	朝日新聞社読売新聞社の取材対応
(開催日)	顔出しパネル設置	

3. 展示資料及び大学史における「寒潮事件」の調査について

(1) 『寒潮』『寒潮事件』に対する理解

本章では、おもにテーマ決定から展示資料決定に至るまでの過程について述べる。本題に入る前に、今回の展示のテーマとなる菊池幽芳の『寒潮』について述べる。

『寒潮』は当時の実話に基づいたとされる恋愛小説であり、物語の経過については井上好人氏の論考に詳しい（井上好人2009「菊池幽芳・新聞連載小説『寒潮』に表象された四高生と女学生の恋愛」『金沢星稜大学人間科学研究』第3巻 第1号）⁵。簡単に内容を述べると、主人公であり四高生がモデルとされる中川乙哉と北陸女塾の女学生である松村久代を中心に3つの恋愛を採り上げ、当時の学生をハイカラであると同時に「墮落」している存在としても描いている。

本節で述べる『寒潮』・「寒潮事件」に対する調査についてであるが、実習生の中には本小説を卒業論文で扱うなど専門的な知識を持つ者がいなかったため、調査・理解を深めるにあたって論文の読み込みが重要となった。

今回、調査を進めるにあたって主に参照としたのは井上氏の論考である（井上好人2013「四高『寒潮事件』に秘められた四高生と女学生との純愛 ―なぜ“墮落学生”のレッテルが貼られたのか―」『金沢大学資料館紀要』第8号）。この論考については2015年10月初旬の打ち合わせで各自内容を理解するよう話し合いが行われた。こうした理解の詳細については評価の項で後述するが、「寒潮事件」を中心に当時の校風改革を関連付けていくという展示の基本コンセプトが、打ち合わせを重ねるなかで次第に固まっていった。

(2) 展示資料の選定

展示資料の選定にあたっては夏季休暇中に、資料館所蔵資料の中から候補のリストアップを進めた。資料のリストアップについてはまず、資料館Webサイトの「資料アーカイブ」⁶を参考にした後、展示班とキャプション班から実習生3名が資料館の収蔵庫で資料を実見し候補を選定した。『寒潮』については、当時掲載されていた大阪毎日新聞の原本を確認できず、石川県立図書館所蔵の複写資料が紙面を窺い知るほぼ唯一の資料であったためこの複製を展示することとした。しかしこの事から、『寒潮』に直接関係する資料が少ないことが予想されたため、南下軍や時習寮など、『寒潮』・「寒潮事件」に関連する同時代の資料も候補としてリストアップが行われた。

資料のリストアップが行われた後は、キャプション班と展示班を中心に資料の絞り込みに向けた打ち合わせを行った。展示の際の大きな課題と認識されたのは、文献などの紙資料が多くなるという点である。打ち合わせでは、来場者が展示を見るにあたって紙資料を読む場面が続くと展示に最後まで集中できなくなる可能性が指摘された。そこで、制服や南下軍の幟、写真類などのモノ資料の割合をできるだけ増やすことにした。

また、モノ資料の割合を増やした理由には、より『寒潮』連載当時の四高生の雰囲気をつかやくと伝えるためという側面もある。資料館ではこれまでも四高生に関する展示は数多く行われてきているが、今回の展示では登場人物や「寒潮事件」当時の四高の雰囲気を伝えることが重要であったため特に配慮された。そうした流れの中で、金沢くらしの博物館に女学生のかつらが所蔵されていることが判明した。資料館所蔵資料には『寒潮』の登場人物である女学生に関する資料はなかったため、『寒潮』の物語をイメージしやすくする目的で借用した（次節にて詳述）。

文献資料については、四高生や職員により発行されていた『北辰会雑誌』と、運動部の対外遠征

の記録が資料館に所蔵されていたため、展示班で調査を行い、「寒潮事件」に触れている箇所の抜粋や現代語訳の作成を行った。

最終的には『寒潮』（複製）や『北辰会雑誌』、南下軍の記録といった文字資料で「寒潮事件」の経過を追い、制服やかつら、そして南下軍の幟やメダル、レコード、時習寮の図面といったモノ資料を通して登場人物や当時の気風のイメージを持たせるという方針のもと展示する資料が決まった（表4）。

表4 展覧会展示資料リスト

資料名	資料年代	所蔵	資料館請求番号
学生服上着(冬用)(複製)	不明	金沢大学資料館	四高117
学生服ズボン(冬用)(複製)	不明	金沢大学資料館	四高118
制帽(複製)	不明	金沢大学資料館	四高119
恋文(ハンズオン)	平成27年		
日本人形(ハンズオン)	平成27年		
香水(ハンズオン)	平成27年		
髪形「束髪」	不明	金沢くらしの博物館	No.24.14-9953
「超然の華」(こけし)	昭和49年	金沢大学資料館	000-01-100-10363
制帽(2本線)	明治45(1912)年	金沢大学資料館	四高146
続南下誌	昭和2(1927)年～昭和22(1947)年	金沢大学資料館	四高509
南下軍	昭和8(1933)年8月21日	金沢大学資料館	四高806-2
第四高等学校剣道記念賞メダル	明治43(1910)年	金沢大学資料館	四高205
賞メダル	明治44(1911)年	金沢大学資料館	四高201
八高挑戦状	昭和17(1942)年5月7日	金沢大学資料館	四高890
レコード	不明	金沢大学資料館	四高228
新並木・四高九谷焼蓋付湯呑茶碗	不明	金沢大学資料館	四高169
新並木・四高九谷焼蓋付湯呑茶碗	不明	金沢大学資料館	四高170
新並木・四高九谷焼蓋付湯呑茶碗	不明	金沢大学資料館	四高171
南下軍の幟	不明	金沢大学資料館	四高1062
第四号六枚之内「金沢大四高等学校寄宿舎附属贈所ノ図」	明治39年	金沢大学資料館	四高799-1
北辰会雑誌 第50号	明治41(1908)年	金沢大学附属図書館	
北辰会雑誌(五) 第41～50号	明治38(1905)～41(1908)年	金沢大学附属図書館	
第四号六枚之内「金沢第四高等学校寄宿舎附属贈所ノ図」 裏書[①第四高等学校寄宿舎火災復旧工事贈所ノ図]	明治39年	金沢大学資料館	四高799
四高人形(四高百十年記念)	不明	金沢大学資料館	四高188
第四高等学校の正門と本館	明治45年	金沢大学資料館	四高1086
物理実験室	明治42年	金沢大学資料館	四高970
四高初期の教職員と生徒 草創期の教授陣	明治22年	金沢大学資料館	四高1026
雪の時習寮全景	明治42年	金沢大学資料館	四高1025
明治37年三々塾生の写真	明治37年	金沢大学資料館	四高383
第四高等学校の全景	明治41年	金沢大学資料館	四高1078
雪の時習寮全景	明治42年	金沢大学資料館	四高1025
時習寮内(勉強風景)	明治42年	金沢大学資料館	四高1085

(3) 資料借用

本節では前述した資料借用について述べる。資料借用は2015年11月19日に金沢くらしの博物館の収蔵庫にて、資料館職員1名と展示班の実習生3名が行った。資料選定と調査作成は資料館職員の指導の下、実習生が担当し、博物館学芸員の職務を実際に体験する貴重な機会となった(図2)。

特に調査作成にあたっては資料を観察する際に重要な事柄を学ぶ機会になったと考える(図3、筆者作成)。調査作成に携わった者として振り返ると、当初は資料そのものを描写しすぎていた。この点は資料館職員の指導の下、資料の状態を正確に記録することに注目できたと考えている。こうした経験は学芸員の職務の経験という点のみではなく、資料としっかり向き合う機会という点においても重要であった。



図2 資料借用の様子

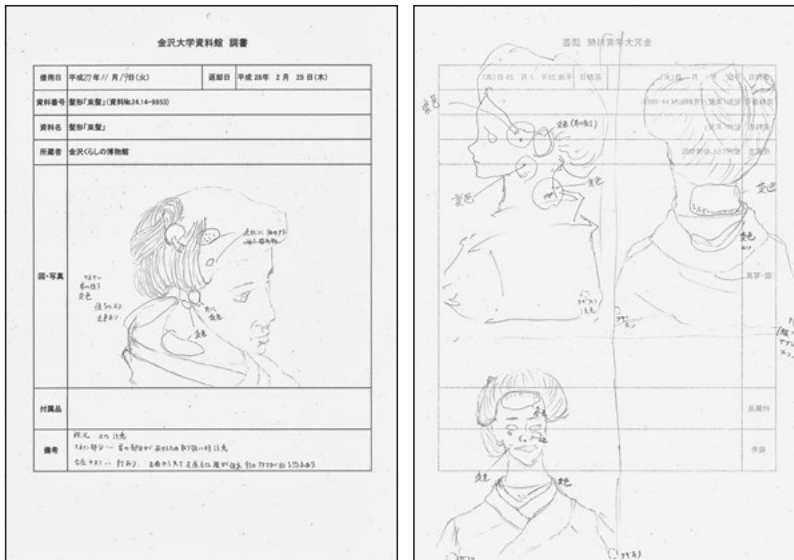


図3 資料調査(左が表面、右が裏面)

(4) 評価

今回の展示準備にあたっては、テーマが四高に関連するものであったため、資料館が所蔵する資料に関してはリストアップから最終的な展示資料の決定に至る過程の中で調査は良好に行われたと思われる。

一方で、今回の展示準備の段階では大きなテーマである『寒潮』、そして「寒潮事件」の調査・理解にあたっていくつか課題点が指摘できる。こうした課題点の最大の原因としては先行研究の精査などの調査不足が挙げられる。以下、順に述べる。

まずは先行研究の調査不足の量的な側面である。今回実習生全体で参考にした文献は前述の井上氏の論考のみであり、展示準備を進めるにあたって「寒潮事件」の経過を理解する上では最低限の知識を得ることはできたと思われる。しかし、本稿の執筆者の一人でもある笠原健司氏の指摘にも

あるように⁷、現代の視点から「寒潮事件」を評価するには至っていない。「寒潮事件」に対する比較的同時代の評価や印象は、断片的ではあるものの当時の文献類から把握できただけに、現代における評価も加えて比較することによって展示により厚みが出たのではないと思われる。

続いて調査不足の質的な側面である。今回の展覧会開始まで約1か月となった頃に、新たな資料として『北辰会雑誌』が追加されている。この資料には「寒潮事件」についての記述が複数確認でき、当時の評価や印象を知る上で非常に重要な資料となった。しかし前述の井上氏の論考には『北辰会雑誌』が採り上げられているため、本来であればもう少し早く発見できたはずである。最終的には発見できたものの、文献の読み込みが不足していた感は否めない。

また、展示準備の段階で『寒潮』・「寒潮事件」が持つ「恋愛小説の要素」と「校風改革の要素」のどちらを展示コンセプトの柱として採り上げるか意見がまとまらなかった時期がある。展示準備の中でこうした事態が生じるのは自然なことであるのかもしれないが、今回の場合では調査不足や、実習生の間で生じていたと考えられる理解や知識量の差を縮める機会が少なかったことが原因となったのではないかと考えている。

こうした問題の解決策としては、やはりテーマ理解・資料調査の時間を十分に確保することが重要であろう。今回の場合、テーマは第2章でも述べているように8月末に決定している。しかし、テーマ理解の参考文献として前述の論文があることが実習生全体で共有できたのは10月初めのことであり、この間におよそ1か月の空白が生じている。夏季休暇中には資料のリストアップが行われており、決して展示の準備作業が行われていなかった訳ではない。ただし、実習生のほとんどは4年生であり、就職活動や卒業論文、館園実習、教育実習などで忙殺される中、全体で集まることができる時間はなかなか確保できなかった。

しかしながら、前述の課題点を考えた際にこの1か月の空白は大きいと思われる。この期間に情報アプリなどを利用して、文献の情報・理解を共有することは対策として採ることができたのではないかと考える。

今後、実習生による展覧会の質のさらなる向上にあたっては、テーマ理解の量的・質的な充実と共に、限られた時間においてそれらを可能にする手段の確保が必要になってくると考えられる。

(野村)

4. 展示室の構成と展示作業について

本章では展示室をどのように構成したかについてまとめる。

資料館展示室は半円形であり、今回は全体を縦に半分に分け、向かって左を常設展スペース、右を学生企画展スペースとしたため、特殊な形となった。入口が学生企画展展示スペースのちょうど正面にあり、単純に進むと来場者の進行方向が左右に分かれてしまうのである(図4)。このため、筆者を含む展示班5名はまず、展示室内を回りやすくするためにはどのような工夫が必要かを話し合うことにした。動線の工夫とテーマを区切ったブース構成がこの問題の主な解決策である。展示配置を考える上で参考としたのは、各々がこれまで訪れた博物館や、博物館展示論等学芸員資格を取るため履修してきた授業内容からの知識である。以下に、この時提案された工夫とそれにより生じた問題点を述べていく。

(1) 展示について

詳細な展示内容、位置については図4のとおりである。

まず、今回の展示を以下のように4つのブースに分けた。

- ①導入・『寒潮』のあらすじ
- ②当時の四高生とその気風
- ③「寒潮事件」の概要
- ④寒潮事件に連なる超然主義の解説

これは、趣旨を明確としたブースを置き、来場者から段階を踏んだ理解を得ることで、「資料と資料の繋がりを考え、展示会のテーマ・結論とは何だったのかを来場者自身が導き出す」という博物館の一つの楽しみ方を本展示で実現できると考えたためである。本展示におけるブース毎の趣旨とそこから実習生が設定した理解の筋道とは、①小説『寒潮』の簡単なストーリーと②当時の四高生の性格や考え方を把握した後、③寒潮事件の概要を知ること、『寒潮』の存在が自尊心の強い四高生たちにとって受け入れがたいものであったこと、④その時芽生えた自治意識がやがて超然主義に繋がっていったことを理解する、というものである。特に①及び②から③への展開はより一層考察に踏み込んだ展示となるため、雰囲気を変えるように黒布を張ったパーテーションで周囲を囲むなど、展示品や解説だけではなく展示室全体を用いて来場者の理解を促すよう工夫した。また、これに付随して、中央に来場者参加企画である「恋愛体験の紹介コーナー」と休憩スペースを設けた。これは本展示のターゲットとして「普段資料館に訪れない学生」が定められていたためであり、恋愛エピソードや設置したソファでの休憩をきっかけに展示室に留まることをねらいとしたものである。また、物語のあらすじという歴史資料を見慣れていない学生でも理解しやすい内容を前方に置き、考察や資料分析を後方に設置することで、導入から難解な印象を持たれることがないように意識した。

(2) 問題点

本展示資料の位置を決定する上で課題となったのは、次の3点である。

- (i) 紙資料と解説が多く、特に寒潮事件を解説するためのモノ資料が少ない。
- (ii) 照明の位置、角度を調節しなければ展示の見え方に影響が出る。
- (iii) 動線を考慮したため、入口正面に見えるものが壁になり、魅力がない。

(i) は展示室の見取り図を見ながら展示位置を話し合っている段階でたびたび取り上げられた課題だが、(ii) と (iii) は実際に展示室で展示をし始めてから問題になった。まず (i) の問題とその解決案をまとめる。

第一に紙資料が中心となったことだが、これはそもそもこの展示会が「寒潮事件」という金沢大学の前身校に関連した事件を取り上げるというテーマから始まり、資料館所蔵の資料で展示できるものがあるかを確かめたのが後からであったということに起因する。このため、四高生に関する資料はともかくとして、『寒潮』のあらすじ解説、寒潮事件の概要説明という重要な2ブースの主な展示物がパネルということになっていた。パネル展示の問題点として、来場者が一つの展示物にかける時間が長くなってしまふことが挙げられる。そもそもあまりに多くの文字が並んだパネルでは、来場者の足を止めることも難しいと思われた。このため、パネル中心の展示コーナーにはいくつか工夫を取り入れた。

まず、文章で説明する場合の一つのパネルの大きさはA3であり、文章もそれに収まるよう、多

いものでも500字ほど、寒潮事件解説パネルは内容が難解なため200字以内とした。これを越えた場合、一読では理解し難いと考えたからである。加えて、当初より企画されていたハンズオン展示の位置も、来場者を引き付ける必要があるため、文章量の多い解説パネルが多くなった第一ブースに定めた。この第一ブースではその他にもキャプション班とデザイン班の提案により、あたかも実際の新聞記事のようなデザインのパネルにするなど来場者の目を引くように工夫した。

次に寒潮事件の解説を行うブースについて述べる。こちらは導入である第一ブースほどキャッチーな展示にする必要はないと考えたが、それでも読みやすさを優先して、事件のきっかけとなった他校生徒によるヤジ、四高生による演説などから象徴的なセリフを取り上げ、それらを視覚的に表現するために、影絵と吹き出しのパネルにするなど、単調なパネルの羅列にならないよう配慮がなされた。これらの影絵、吹き出しパネルは解説や顔出しパネルと同様の糊付きの展示用スチレンボードを切り出して制作している(図5、図6)。影絵は展示班内でも概ね好評であったが、パーティションの布に黒を用いることを考慮しておらず、白枠を付けた上で影絵を作らねばならなかったことがパネルの製作段階に問題となった。

また、文字情報ばかりの展示にならないように、四高の応援歌を流す、作中で登場人物が持っていた香水瓶を模した瓶を置くという案も計画されたが、これらも実際に展示する上で配慮が必要となった。応援歌に関しては、展示室が図書館に付設しており、入口の扉は常に開かれているため、音が図書館内に漏れないよう調整しなければならなかった。また、香水瓶は当初、中に実際の香水(もしくは匂いを付けた脱脂綿など)を入れ、作中の人物と同じ体験をしてもらうというねらいであったが、これは匂いによる展示物へのダメージを配慮して中止となった。どちらもただ視覚情報だけの展示を考えていた場合は気づけなかった問題であり、提案後に資料館職員からの指摘を受けて議論しなおした。

次に展示を行う上で発生した問題点(ii)及び(iii)についてまとめる。(ii)の照明の問題について、展示室内部には固定の照明に加え、壁面を照らす移動式の照明が設置されていたという前提があった。これは天井に取り付けられたレール上であればどこでも移動させることができるものである。これらは主に第一ブースから第二ブースにかけて用いられたが、問題となったのはその狭間にある『寒潮』連載中の新聞記事(縮刷版の複製)を展示したガラスケースであった(図7)。これは高さが2m近くあり、どの角度から照明を当てても、ケースに光が反射してしまうのである。反射させないため照明の位置を下げると来場者の目の高さに合わせて配置した新聞パネル周辺が暗くなってしまったため、光が眩しくなく、かつ読みやすい明るさを保つ照明の調節に時間を費やした。照明の位置とガラスの反射については当初、展示室の見取り図を受け取った段階では確認できておらず、展示位置を考える前に把握するべきであったという声が多々多く出た。

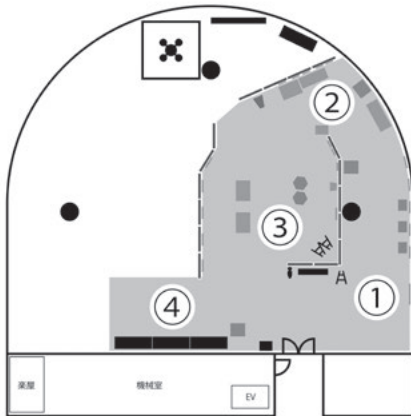
また、(iii)の動線の問題は展示配置がまとまった頃に指摘があり、当初「ごあいさつ」の書かれたボードと四高時代の制服を着用したマネキンのみ展示する予定であったが、資料館が保持していた大型モニターも加えて設置することとした。加えて、展覧会のオープニングムービーも作成した。これは図書館内から資料館方向へ歩く際、一番はじめに目に入る場所にテレビがあること、今まで資料館に入ることがない学生を呼び込むという目的上、目を引きやすいものを展示すべきとの意見が上がったことによる。この際参考にしたのは石川県立歴史博物館の常設展入り口のムービーである。応援歌と同様の理由で音楽などは流せず、『寒潮』の挿絵や展示物を利用して、学生がパワーポイントを用いて動画を作成した。

(3) 事後評価

展示資料の詳細な位置決定などはやはり見取り図のみを用いて話し合っているだけでは定まらず、大まかな位置取りが決定してからは資料館展示室で実際の展示ケースを動かしながらの相談となった。特に、資料を配置する際の来場者から見やすい角度、手に取りやすい高さといった詳細な調節は、空き箱や展示台を用いて最後まで議論が必要となった箇所であり、これらにかかる時間を考慮して日程を考える必要があると思われた。紙や布といった展示のダメージが残りやすい展示品を固定する方法については、実習や講義で学んだ知識が役に立った(図8)。

最も時間をかけた議論は展示室内の動線とそこから導かれる展示のストーリーであった。どのようなストーリー・ラインを設定し、来場者に展示テーマを理解してもらうのが決まってからは比較的スムーズに進展していった。展示物の配置を決めるためには、一つの論文を書くときと同様、テーマや資料に関する理解と、それらをどう用いれば矛盾なく結論までを導き出せるかを考察すること、実際に展示を行い、来場者から資料がどう見えるか、どう配置すればストレスなく展示に集中できるかを考えることが必要であると考えた。博物館内の照明をはじめ、壁や柱の位置、展示ケースのサイズ等の情報は最初に把握、整理し、ある程度具体的なイメージを持って展示配置の議論が行えれば好ましいと感じた。

(虫明)



①～④は本文11ページの展示ブース番号

図4 展示室内見取り図



図5 パネル作成の様子



図6 パネル展示の工夫



図7 新聞(複製)の展示

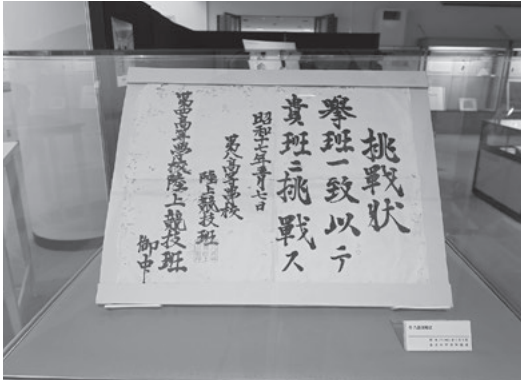


図8 紙資料を展示する台の工夫

5. 関連企画等の実施について

今回の企画展において、実習生は金沢大学内外でその関連企画として様々なイベントを行った。この理由は二つあり、一つは展示内容について興味を持ってもらい、多くの人々に展示会へと足を運んでもらうこと。もう一つは来場者に展示内容についての理解を深めてもらうことである。

(1) 顔出しパネル

前年度の学生による企画展においても1枚の顔出しパネルが製作され、好評だったことを受けて、今年度においては、同様のパネルを3枚製作した(図9参照)。枚数を増やした理由は、資料館周辺のみならず、そこから離れた場所にもパネルを設置し、より幅広い層の人々の興味を惹く効果を狙ったものである。寒潮の挿絵として使われていたイラストをもとに顔出しパネルを作成、金沢大学図書館資料館側入口と資料館内部に1枚ずつ、大学会館1階に1枚の計3枚のパネルを設置した。金沢大学図書館資料館側入口に設置されたパネルは遠くからでも目を惹き、主に客寄せの役割を担っていた。また、パネルを入口に設置しては来場者がそこで記念写真を撮ることをためらうのではないかという意見もあり、資料館内部のパネルは比較的外部から見えにくい休憩スペースに設置した。こちらは記念写真を撮ってもらうことが目的であるため、照明の位置が逆光にならないように注意した。その甲斐もあって、パネルを利用して記念写真を撮る学生の姿をたびたび見ることができた。大学会館のパネルは前述したように幅広い層に向けての告知の役割を担っており、資料館とは少し距離がある場所に設置するよう配慮した。大学会館は生協、購買等がある金沢大学における中心施設であり、時間を問わず多くの学生が利用しているため、設置に適していると判断した。

(2) ミュージアムツアー

企画展の開催期間のうち、平成28年1月18日から1月22日までの5日間、12時30分から12時45分まで、展示室でミュージアムツアーを行った(図10参照)。事前予約は不要、参加費は無料であり、ツアー開始の5分前には中央図書館館内放送で参加者を募った。展示班、キャプション班、デザイン班、企画班の代表それぞれ2名が日替わりで解説を担当した。単純な解説だけではなく、展示パネルで解説しきれなかったことや、企画展設営中の裏話を交えながらのツアーであり、解

説の担当者によって、その特徴が色濃く反映される企画となった。毎回10名前後の参加者があり、学外から訪れた人も多数参加した。ツアーの終わりに設けられた質問コーナーでは多くの質問があり、ツアーの終了時刻を超過してしまう場面もしばしば見られた。

(3) テレビ出演

大学の展示を広く地域の人々に知ってもらうために、実習生3名がテレビ金沢の情報番組『となりのテレ金ちゃん』における30秒劇場という人気コーナーに出演した(図11参照)。このコーナーは誰でも参加可能であり、30秒間でのみ任意のイベントなどをPRできるというものである。視聴者に印象付けるということを最大の目標に据えたうえで、限られた時間の中でどのようにプレゼンテーションを構成するかということについて検討を重ねた。その結果、実習生2名が小説の登場人物である「乙哉」と「久代」に扮して寸劇を繰り広げた後、もう一人がパネルを手に学生による企画展の情報を伝えるという構成でPR活動を行うこととなった。

筆者は実際に3名のうちの一人として出演したのであるが、出演する旨を事前に知らせていない人からもたびたび反響を聞くことができ、このコーナーの人気の高さを実感するとともに、番組への出演が展示を周知する有効な手段となりえたことを確認できた。

(4) 本の紹介

金沢大学中央図書館2階図書カウンター前において、企画展の会期中に、「破かれた恋愛小説」にちなんで恋愛小説の特集を行った。当初は本の紹介のみを行う予定であったが、中央図書館の協力を得て、それらの本をその場で借りることができるようにした。二葉亭四迷の『浮雲』や、伊藤左千夫の『野菊の墓』といった小説35冊を実習生が選定し、それらに手作りの帯を付け、その中でも抜粋した8冊には紹介文を添えて特設のコーナーをつくった(図12参照)。これらの小説はどれも多くの人に貸し出された。また、同コーナーには後述する恋愛エピソードを募集するポスト(後述)も設置した。

(5) 恋愛エピソードの募集

金沢大学の学生に向けて恋愛エピソードを募集し、それらに実習生がコメントを添え、展示室で公開した。自ら投稿したエピソードがコメント付きで公開されるのであれば、普段資料館を訪れることのない層の人々が来場してくれるのではないかと期待して企画した。公開方法としては、募集したエピソードをPDF化したものをiPadに入れた後に、それを閲覧可能な状態にして休憩スペースに設置したほか、いくつか抜粋したものを入口に置いたモニターに連続して映し出し、来場者が自然と目に留まるよう趣向を凝らした。エピソードの募集については、大学構内に専用のポストと応募用紙を置き、そこに投函してもらうという形式で行った(図13参照)。資料館近くのカフェ(ほんわかふえ)に8箱、前述した図書館内の特設コーナーに1箱、資料館に1箱の計10か所に設置し、1週間に1回、回収を行った。

その集まりは予想を上回るものであり、総数40通ものエピソードの投稿があった。学生のみならず、様々な層の人々から投函があり、展示室内においても大きな存在感を放っていた。受動的になりがちな展示室における双方向型の展示であり、エピソードの投稿者からは、展示内容を身近に感じる事ができたという意見も寄せられた。

(6) ツイッター

実習生が管理するアカウントにより、企画展設営の様子や、実際に開催された後の様子、関連企画の実施などについて写真を交えながら告知した。当初は資料館の公式アカウントとして活動する予定であったが、SNSという性質上、大学側との意見が一致せず、あくまで実習生が非公式に作成したアカウントであるという体裁で活動を行った。

主に金沢大学の学生に向けた広報活動という側面が強かったが、リツイートを繰り返すことで学外への告知においても一定の成果を挙げることができた。

(7) ラジオ

FM石川で流れているラジオ番組、『金沢大学 Radio Campus』において、実習生2名が出演、学生による企画展のPRをおこなった。この番組は金沢大学の放送サークルがFM石川と提携して主催している3分間ほどの番組であり、主に金沢大学の情報について発信するものである。今回は番組側からオファーがあったため、参加、告知を決定した。企画展の概要の他、学生による展示であること、恋愛がテーマで一般の方でも楽しめることを強調した。

(8) 資料館だより

金沢大学資料館発行のニューズレターである『資料館だより』の49号と50号において、「破かれた恋愛小説」の記事を掲載した。49号においては、展示会の概要や日程の他、実習生が企画展設営を行う様子を写した写真や、実習生代表によるインタビューも掲載された。50号においては、学生による企画展が好評であったこと、後述するが、金沢城内で再展示が行われる旨が掲載された。

このパンフレットは館内での配布のほか、ホームページでの公開も行っており、多くの人々の目に留まった。

(9) 金沢城公園（河北門二の門内）アウトリーチ（出張）展示

学生企画展が終了した後も、平成28年10月25日から11月4日にかけて、金沢城公園の河北門において、本展示を縮小した形でアウトリーチ展示が行われた（図14参照）。毎年秋に開催される金沢大学ホームカミングデーに合わせて、金沢大学資料館は金沢城公園内の施設において企画展を行っており、本アウトリーチ展示は同企画展の一環として開催されたものであった。

県内外の観光客が訪れる会場では、多くの来場者が興味深くパネルや展示資料を見る姿があった。本アウトリーチ展示は、資料館展示室での学生企画展が好評だったことを受け、資料館長及び職員の判断で学生企画展の魅力を是非とも周知したいという話し合いがなされたことから始まったもので、学友支援室及び情報部の協力の下で実現した。

(10) 事後評価

今回の企画展は、普段資料館を訪れない人たちに足を運んでもらうことを大きな目標とした。それは、今回の展覧会における「恋愛」というテーマにも反映されている。それにともなって、関連企画もこの趣旨に沿ったものを多く企画した。顔出しパネル、ミュージアムツアー、本の紹介、恋愛エピソードの募集といった企画は、資料館に興味を持たない学生を呼び込む企画として機能した。その一方で、テレビ出演、ラジオ出演、SNSを用いた広報活動、資料館だよりといったように、学外に向けた情報発信にも力を入れた。その結果として、学内学外問わず多くの人々に足を運んで

もらうことができた。来場者アンケートにおいても、この企画展をきっかけにはじめて資料館を訪れ、その良さを発見したという声が寄せられた。さらに、四高の卒業生の方が何名か来場し、懐かしそうに展示を見ている場面もあった。

今回の関連企画においても、学内外の様々な施設、番組と提携した。企画展の存在をいかに広めるかということが、展示会の成否を分ける重要なポイントであると考えたからである。視野を広く持ち、資料館という枠組みを超えて外へと飛び出す姿勢が、企画展の設営には重要である。

(渡辺)



図9 休憩スペースと顔出しパネル



図10 ミュージアムツアーの様子



図11 『となりのテレ金ちゃん』収録



図12 図書カウンター前特設コーナー



図13 恋愛エピソード投稿用のポスト



図14 アウトリーチ展示の様子

6. 資料館で学生企画展を行う意義

資料館は金沢大学のキャンパス総合移転にともない、学内の貴重な資料を収集、保存、公開するために、1989（平成元）年に開館した。大学の共同利用施設としての性格上、学生及び教職員の利用を重視しており、授業での活用を促進させることは大きな目標である。

学生による企画展は、平成26年度から始まった試みであり、本学では比較的新しいものだが、資料館が博物館に関する科目との連携を始めたのは意外にも早く、1990（平成2）年に記録が残っている。ここから2008（平成20）年までの18年間、断続的に博物館実習の受け入れがあったものの、いずれも本報告で述べているような学生による大規模な企画展は行われていない⁸。大学博物館は規模においてその差が大きい、資料館は小～中規模に入ると言える。組織は、館長1名、副館長1名（いずれも兼任）⁹、職員3名（学芸員1名含む。いずれも非常勤）の計5名で十分とはいえ、設備も重要文化財を取り扱えるようなものではない。収蔵スペースは文書収蔵庫が123㎡、モノ（学術）資料収蔵庫が180㎡である。展示室は附属図書館から入ることができ、アクセスは便利だが、301㎡で、大規模な展示を行うには十分な広さとは言えない。収蔵資料は文書・モノ合わせて86,000点を超える。所蔵資料の整理・登録も未だ進行中であり、コレクションの総数を把握することは今後の課題である。専任の教員及び常勤職員が開館以来配置されていないこともあり、資料の体系的かつ博物学的な研究が十分でないことも確かである。そうした状況・環境の中、学生による企画展が可能になった要因は、何より実習生のマンパワーであったと言える。企画開始当初の平成26年は、学生はもとより、職員にとっても全てが初めてのことで、模索の連続であった。他大学でも学生による展示の事例¹⁰は見られるが、その形態は様々であり、各大学の裁量によって開催されるため、参考となるモデルケースを見出すことは困難であった。しかし、企画段階から担当教員の意図は明確で、教職員は学生の自主性を重視し、技術的・実務的な作業をサポートするという立場をとることであった。学生が主体的に問題を見出し、課題をこなすといった能動的学修は、アクティブラーニング¹¹と言われる。本企画展ではこれが自然と行われたといえる。ここでは、まともに代えて、これまでの報告を受け、学芸員の立場でその意義を述べていく。

まず、企画展のテーマ決定までの経過では、展示テーマを決定すること、実際に展示できる資料が資料館にあるかどうかの問題となっている。実習生は、資料館が提供した所蔵資料の目録と自分たちで取り上げた「恋愛」という等身大のテーマを結びつけながら、資料選定を行った。四高の校風改革運動の中に位置づけられる「寒潮事件」は、すでに大学史で語られるようなプロットが存在していたので、ストーリー性のある展示構成が可能であることはわかっていた。しかし、実際に展示となると、テーマに関係するような目を引く立体物の資料が少ないため、困難を極めたと思われる。企画を進めて行く中で、展示資料のリストアップから展示テーマ決定、と一方向で進んだわけではなく、行きつ戻りつがあったことが、議論を活発にさせ、結果的にはコンセプトを明確にしたといえる。学芸員が展覧会を企画する際にも同様の作業を行うことが多いため、自然な流れであったのではないだろうか。また、学芸員が一人であれば、企画から展覧会オープンまでの行程を計算し、テーマ及び関連企画を上げすぎないようにある程度制約してしまうが、学生たちは意図せず企画を制約しなかったため、多彩な展示が可能になった。一方、学生と学芸員間のやりとりについては、既出のように問題もあった。資料館の窓口は筆者（学芸員）のみであり、4つある班の全ての情報を一カ所で受け付けるにはやや無理もあった。これについては、協議事項及び質問事項をまとめた上で週に一度の博物館実習の授業時間に議題として出し、これに資料館職員も出席

し、共有するといった方法が考えられる。

次に、展示資料の選定では、テーマ設定でもふれた、文献及び解説パネルが多くなることが問題となった。対処としては、「寒潮事件」と同時代の明治40年代とそれ以降の四高同窓会旧蔵資料などを中心に参考品として展示し、飽きずに最後まで展示のストーリーを見せるというものであった。集客が確実に期待される目玉の展示物があるならばこうした手法は必要ないが、本展示のように一般的な知名度の低い所蔵資料、作品を扱う場合はこうした手法をとらざるを得ない。だが、これを逆手に取るならば、貴重だが知名度の低い資料や、著名でないテーマを、来場者に興味を持ってもらい、教育効果を発揮させ、文化的な満足感を与えられるのは、学芸員の腕の見せ所とも言える。また、展示に関する文献の事前調査不足についての反省があるが、これについては短い準備期間にも関わらず、十分に行われたと言える。欲を言うならば先行研究調査を行う班があれば、より多角的な表現手法が可能であったと考える。

続いて、展示室の構成と展示作業については、資料館展示室が特殊な形状のため、来場者の動線とブースの配置で多くの工夫が必要となった。ここで特筆すべきは「恋愛体験の紹介コーナー」であろう。来館者が自身の恋愛エピソードを書いてポストに投稿するとこのコーナーに設置されたiPadで紹介されるという仕組みは、まさに参加型・双方向型の展示といえる。科学館以外でも参加型・双方向型の展示が行われるようになってきたが、来館者の「恋愛」を展示してしまうというアイデアには驚いた。また、このコーナーが展示の最後ではなく、『寒潮』のあらすじと「事件」の間にソファとともに設置されたことも、緩急のある構成となったと思われる。それ以外のブースについては、4（虫明）の本稿にもあるように展示室で実際に什器及びパネルを設置しながら試行錯誤する他はなかったため、各班のリーダーを中心に現場で多くの議論が交わされ、洗練されていったのは自然な流れであったといえる。

最後に、関連企画等の実施について評価を述べる。学生による企画展以外では、来場者に資料の解説をしながら展示資料を見てもらうミュージアムツアーを行うのが通例であるが、ここでも多くのアイデアが出たため、複数のイベントが行われた。5（渡辺）の評価でも述べられているとおり、企画展の関連イベントが館外に飛び出し、多くの市民の目に触れたことで、展覧会はもとより、資料館の存在を知らしめることにもつながり、非常に有効な手段となりえた。

総じて見てみると、数は力なりともいえるが、一度走り始めると納得するまで追求し、それを形にしようとする実習生のマンパワーには感服するばかりである。博物館実習の単位をとり、学芸員資格を取得しても、学芸員や文化財に携わる仕事に就く卒業生は一握りであるのは事実だが、この展覧会の企画を通して意見の違う者と協議することの重要さや、情報を発信する際の責任、異なる研究分野のクラスメイトと一つのものを作り上げるための協調性などを身につけるといった得難い体験が卒業後の活動に大きな糧となることは間違いないと思われる。また、学生のみならず、受け入れ側の資料館職員にとっても貴重な事業となった。資料館での学生企画展は模索段階であるが、今後、こうした試みの中でモジュール化できるものが明確になり、カリキュラム上のスケジュールが明示できれば、小規模な大学博物館でも行えるような学生企画展のモデルケースを提案できるものと考えられる。

(笠原健司)

注

- 1 有村誠「金沢大学資料館の学芸員養成プログラムにおける取り組み: 大学博物館の原風景」『金沢大学資料館紀要 No.10』2015年3月、金沢大学資料館／笠原健司「金沢大学資料館における博物館実習の取り組み」『金沢大学資料館紀要 No.11』2016年3月、金沢大学資料館
- 2 報告者は本稿の執筆時点で金沢大学を退職しており、本稿の内容はあくまで報告者が博物館実習を担当した2014～2015年度の授業に限った内容であることをお断りする（有村）。
- 3 前掲書、有村誠（2015）
- 4 博物館実習を履修できる条件を、原則、他の博物館科目をすべて履修済みであることにしていたため、履修年が自ずと4年目になった。
- 5 なお、井上氏は『寒潮』について「家族小説」としている。しかし、本稿では実習生が展示の企画にあたって恋愛の側面を重視したことから「恋愛小説」と表記する。
- 6 URL: http://kuv.m.kanazawa-u.ac.jp/?page_id=17（2017年1月20日時点）
- 7 前掲書、笠原健司（2016）p. 62
- 8 前掲書、笠原（2016）pp. 55-57
- 9 資料館規程では「前項の職員のほか、必要に応じ、資料館副館長(以下「副館長」と言う。)及び客員研究員その他の職員を置くことができる。」(第4条)であるため、常時配置されるわけではない。
- 10 例えば、大阪大学総合学術博物館「阪大生がつくった展覧会」、武蔵野美術大学通信教育課程における展示実践、法政大学 博物館実習IIにおける展示実践、学習院女子大学における展示実践、甲南大学の博物館実習「西淡路希望の家の美術部展」等があげられる。
- 11 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」2012年8月28日、中央教育審議会、p. 9